

## 追跡調査での外部テストの活用

——「学力の3要素と学修成果の可視化」の可能性——

福島 真司, 日下田 岳史 (大正大学)

文部科学省高大接続システム改革会議及び高大接続改革プロジェクトチームでは、これからの時代に向けた教育改革における「学力の3要素」を重視した方向性を明示した。これに従う大学入試改革では、「学力の3要素」を踏まえた選抜や入試制度の評価が求められる。本稿は、外部テスト活用について、2種類のテストと学生データを統合して考察した結果、学力の3要素との関係性や学習成果の可視化に関する知見を得、追跡調査等での外部テスト活用に関する一定の可能性を示すことができた。

キーワード：追跡調査, 学力の3要素, 学修成果の可視化, 外部テスト

### 1 はじめに

2016年3月31日に公表された高大接続システム改革会議「最終報告」では、「これからの時代に向けた教育改革を進めるに当たり、身に付けるべき力として特に重視すべきは、(1)十分な知識・技能、(2)それらを基盤にして答えが一つに定まらない問題に自ら解を見いだしていく思考力・判断力・表現力等の能力、そして(3)これらの基になる主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度である」と明示し、この3つの要素を「学力の3要素」と呼んだ。その上で、高等学校教育においては、『学力の3要素』を踏まえた指導が十分浸透していないことを課題」とし、その背景として、現状の大学入試において、「知識の暗記・再生や暗記した解法パターンの適用の評価に偏りがちであること」を指摘している。

2017年1月31日に公表された文部科学省高大接続改革プロジェクトチーム「高大接続改革の動向について」では、学力の3要素を「① 知識・技能の確実な取得」「② (①を基にした) 思考力・判断力・表現力」「③主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」とやや簡素な表現で言い換え、「学力の3要素を多面的に評価する大学入学者選抜」のために、「大学入学共通テスト」では、思考力・判断力・表現力を一層重視した入試とするため、「記述式問題の段階的導入」「マークシート式問題の改善」を行い、一方で、各大学が実施する「個別入学者選抜」においては、「明確な『入学者受入れの方針』に基づき、『学力の3要素』を多面的・総合的に評価する選抜へ改善」へと向かうこととなった。

各大学は、この方向性のもと、大学入試改革を進めているところであるが、大学入学共通テストが実施

される2020年度以降は、入試区分ごとに入学後の学習成果等を検証する、いわゆる「追跡調査」においても、学力の3要素を念頭においた設計が必要になると考えられる。また、入学者の学力の3要素のその後の変化を分析することができなければ、一連の入試制度改革や個別大学の入試改革が成果につながったのかどうかを検証できない。検証のためには、学力の3要素の可視化が、まず必要となるが、これは一大学のみが持つデータの範囲では容易ではない。

そこで、大学外の専門的知見を持つ企業が開発したテスト(以下、外部テスト)等を用いて学修成果の把握を試みる大学も出てくることとなるが、文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室が毎年度公表している「大学における教育内容等の改革状況について」では、2015年度調査において学修成果の把握を行っている354大学のうち67.8%にあたる240校が「学修成果の把握方法」として「外部の標準化されたテスト等による学修成果の調査・測定(アセスメントテスト等)」を用いていることを報告している。公表されている最新の「大学における教育内容等の改革状況について(平成28年度)」では、「学修成果の把握を行っている375大学のうち69.6%にあたる261校が「外部の標準化されたテスト等による学修成果の調査・測定(アセスメントテスト等)」を用いていることを報告しており、その数は増加傾向にあることがわかる。リベルタス・コンサルティング(2018)では、「大学における教育内容等の改革状況について(平成27年度)」において「外部の標準化されたテスト等による学修成果の調査・測定(アセスメントテスト等)」を用いた240校を調査した結果(213校355学部等から回答)、用いているアセスメント・

テストのうち、最も多いものは「民間事業者等の検定試験や資格試験等 (TOEFL, TOEIC 等)」(36.3%)であり、次に多いものは「ジェネリックスキルの測定を含む大学等向けのテスト」(33.5%)であった。それに対し、「学校独自で作成したアセスメント・テスト」は 18.0%と、約半数しかない。これらのことから、今後、学修成果の可視化に外部テストを用いる傾向は高まるのではないかと考えられる。

以上のような状況下において、本稿は、外部テストを用いた学力の 3 要素を検証することで、今後の追跡調査における外部テストの活用の可能性について考察することを目的とする。

## 2 調査概要

### 2.1 調査対象

首都圏に所在する中規模私立大学である A 大学の 1 年生、3 年生のデータを用いる。この 2 学年に対しては、2018 年度に外部テストである GPS・Academic (以下、GPSA) 及び PROG の受検を実施しているため、複数の外部テストによる検証が可能であることが理由である。

### 2.2 分析に用いるデータ

上記した 2 学年に関する以下のデータを用いる。なお、( ) 内の表記は、調査や受検した時期を表している。

- ① GPSA (1, 3 年次 7 月～10 月)
- ② PROG (1 年次 4 月)
- ③ 基礎学力調査 (国語, 英語, 数学)  
(1 年次 4 月)
- ④ 通算 GPA (2018 年度春学期まで)
- ⑤ 高校 3 年 4 月時の A 大学志望順位  
(1 年次 4 月あるいは 12 月～1 月<sup>1)</sup>)
- ⑥ 受験時の A 大学の志望順位  
(1 年次 4 月あるいは 12 月～1 月)
- ⑦ 入学時点での進路先としての満足度  
(1 年次 4 月あるいは 12 月～1 月)
- ⑧ 現時点での A 大学の総合的な満足度  
(1, 3 年次 12 月～1 月)
- ⑨ 大学進学のための目的 (1 年次 4 月<sup>2)</sup>)
- ⑩ 授業外学修時間 (1, 3 年次 12 月～1 月)

①②は、外部テストである。①は、「問題を解決するベースとなる思考力」や「主体的に課題に取り組む姿勢」等の「汎用的な能力」を可視化するアセスメントして、株式会社ベネッセコーポレーションが開発したものである (ベネッセ i キャリアほか, 2019)。

インターネットを利用し、紙では実現出来ない音声、動画問題も交えた出題で、「思考力 (批判的思考力, 協働的思考力, 創造的思考力)」「姿勢・態度 (レジリエンス, リーダーシップ, コラボレーション)」の客観的な測定と、「思考力」については自己評価も聞き、加えて、「経験 (自己管理, 対人関係, 計画・実行)」「学びへの意欲」についても自己評価を聞いている。また、思考力の測定には、選択式問題だけではなく、記述・論述式問題もあり、学力の 3 要素に表れる「表現力」の測定も可能な設計となっており、概ね学力の 3 要素に近似した名称の能力を測定する構成となっている。そのため、本稿では①のデータと他のデータの関連を考察することに中心をおくこととする。

②は、学校法人河合塾と株式会社リアセックが、「リテラシー」と「コンピテンシー」の両面からジェネリックスキルの測定するために開発したテストであり (成田, 2014), A 大学は、そのうち「コンピテンシー」のみを受検している。測定するコンピテンシーは、「対人基礎力 (親和力, 協働力, 統率力)」「他自己基礎力 (感情抑制力, 自信創出力, 行動持続力)」「対課題基礎力 (課題発見力, 計画立案力, 実践力)」の項目からなっている。

①と②の外部テストでは、後述する表 2 にまとめたように、それぞれのテストで測定できるとする内容が、特に中分類項目では、類似したものがある。これらの項目同士に関連が見られれば、両テストで測定できるとする内容が測定出来ているのではないかと考えた。

③から⑨のデータについては、A 大学が蓄積する学生データの中から、学力の 3 要素である「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」に関連すると考えられるデータを抽出した。

③は、A 大学入学者が毎年度入学式直後に受検しているもので、「国語」「数学」「英語」の 3 教科からなり、毎年度可能な限り同じ問題を利用しているものである。英語の能力別クラス編成の根拠等にも採用されている。これは、④と共に、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」に関連する尺度として用いる。

⑤から⑩は、入学時に実施しているアンケート調査あるいは毎年度秋学期に実施しているアンケート調査から、「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」に関連すると考えられる質問項目を抽出した。

①の外部テストで測定しているとする内容が、測定できているとすれば、③から⑩のデータとの関連性を見ることで、学力の 3 要素が学生データとどのような関連性があるのかを理解することにつながると

考えた。

なお、②から⑨のデータについては、A 大学 1, 3 年生のほぼ全員のデータが揃っているが、①については、2018 年度に試験的に導入したため、1, 3 年生全体の 34.5% (845 人) のデータのみである<sup>3)</sup>。また、本稿は追跡調査における外部テストの活用を考察することを目的としているため、入試区分ごとの比較も適宜実施する。

### 2.3 GPSA 受検者の性質

図 1 は、①のデータ、すなわち、GPSA の受検者の入試区分の割合を、全体の割合と比較したものである。これをみると、概ね全体の傾向に近い割合と言える。

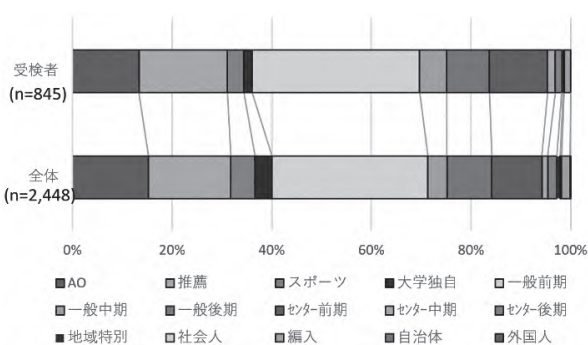


図 1 GPSA 受検者の入試区分別の割合

一方で、GPSA 受検者と非受検者で、PROG, GPA, 基礎学力調査のスコアを比較してみると、表 1 のような結果であった。PROG のスコアは概して非受検者の方が高いが、学力に関係する GPA, 基礎学力調査のスコアは、受検者の方が高いことがわかる。今年度の A 大学における GPSA の受検は、1 年生、3 年生を対象に希望する者だけの受検であった。学生へは、「文部科学省が大学生に求める『学力の三要素』が、現段階でどの程度身についているかを測定するテスト」と説明し、受検するよう呼びかけたため、それに応じた学生の性質を表していると考えられる。

表 1 GPSA 受検者の特性

GPSA 受検有無	人数	PROG				通算 GPA	基礎学力調査		
		PROG総合	対人基礎力	対自己基礎力	対課題基礎力		英語換算	数学	国語
受検者	845	2.7 (1.54)	3.0 (1.66)	2.8 (1.47)	3.3 (1.57)	2.6 (0.51)	55.9 (16.69)	40.6 (12.05)	69.2 (12.03)
非受検者	1,603	2.9 (1.54)	3.3 (1.76)	3.1 (1.51)	3.2 (1.58)	2.3 (0.61)	50.7 (18.83)	38.4 (11.82)	67.4 (12.75)
全体	2,448	2.8 (1.54)	3.2 (1.73)	3.0 (1.50)	3.2 (1.58)	2.4 (0.60)	52.5 (18.27)	39.1 (11.94)	68.0 (12.53)

※ それぞれ上段が平均、(下段)が標準偏差を表す。

## 3 考察

### 3.1 各データ間の関連

#### 3.1.1 外部テスト GPSA と PROG の関連

本稿では、2つの外部テスト、すなわち、GPSA と PROG のデータを用いる。両テストは、測定内容が類似しているものもあるため、まず、両者の関連を見ることが、両テストが測定したいものを測定できているのかどうかを検討する。なお、両テストが測定しているとする内容等をまとめると、表 2 の通りである<sup>4)</sup>。

表 2 GPSA と PROG の概要

テスト名	大分類	中分類	設問形式	測定方法	学力の3要素との対応	
GPSA	思考力	批判的・協働的・創造的	選択式及び記述・論述式	客観評価及び自己評価	思考力、判断力、表現力	
		レジリエンス	選択式	客観評価		
	姿勢・態度	リーダーシップ・コラボレーション	選択式	客観評価	主体性を持って多様な人と協働して学ぶ態度	
		自己管理	選択式	自己評価		
経験	対人関係・計画・実行	選択式	自己評価			
	学びへの意欲		選択式	自己評価		
PROG	コンピテンシー	対人基礎力	親和力・協働性・統率力	選択式	客観評価	主体性、多様性、協働性
		対自己基礎力	感情抑制力・自信創出力・行動持続力	選択式	客観評価	
		対課題基礎力	課題発見力・計画立案力・実践力	選択式	客観評価	
	リテラシー	問題解決力	情報収集力・情報分析力	選択式	客観評価	思考力、判断力、表現力
			課題発見力・構想力	選択式	客観評価	
		言語処理力	非言語処理力	選択式	客観評価	
			言語処理力	選択式	客観評価	

※ PROG (リテラシー) はA大学では未実施のため、網掛けしている

GPSA は、大分類として「思考力 (選択式)」「思考力 (論述・記述式)」「姿勢・態度」「経験」「学びへの意欲」を測定しており、一方で PROG (コンピテンシー) では、「対人基礎力」「対自己基礎力」「対課題基礎力」を測定しているとしている。

GPSA と PROG (コンピテンシー)<sup>5)</sup> の大分類項目間の相関を測定した結果を、表 3 に表す。

表 3 GPSA と PROG の大分類間の相関係数

	PROG		
	対人基礎力	対自己基礎力	対課題基礎力
思考力 (選択式) (n=827)	-0.12**	-0.14**	0.04
思考力 (記述・論述式) (n=287)	-0.14*	-0.11	0.05
姿勢・態度 (レジリエンス) (n=827)	0.32**	0.52**	0.05
PSA 姿勢・態度 (リーダーシップ) (n=827)	0.51**	0.59**	0.21**
姿勢・態度 (コラボレーション) (n=827)	0.56**	0.35**	0.10**
経験(n=827)	0.41**	0.46**	0.37**
学びへの意欲(n=827)	0.37**	0.40**	0.15**

\*P<0.05, \*\*P<0.01

これを見ると、GPSA の大分類項目「思考力」は、選択式、論述・記述式ともに、PROG のどの大分類の項目とも、ほとんど相関が見られないことがわかる。



なお、表中にはないが、「思考力」については、GPSA の他の大分類項目とも相関がなく、唯一「思考力（選択式）」と「思考力（論述・記述式）」に、0.45 と正の相関があるのみであった。

GPSA の大分類項目「姿勢・態度」は、「レジリエンス」「リーダーシップ」「コラボレーション」と 3 つの中分類項目に分かれ、それぞれ性質が異なるため、大分類項目の合算値（総合値）がない。そのため、3 つの中分類の項目「レジリエンス」「リーダーシップ」「コラボレーション」と、PROG との相関を測定したところ、「レジリエンス」と「対人基礎力」及び「対自己基礎力」とは 0.32, 0.52, 「リーダーシップ」とはそれぞれ 0.51, 0.59, 「コラボレーション」とはそれぞれ 0.56, 0.35 と、低い正の相関か、正の相関が認められた。一方で、「姿勢・態度」と「対課題基礎力」との相関係数は、「リーダーシップ」のみが 0.21 と低い正の相関関係があるのみで、ほとんど相関がなかった。

ところで、GPSA の「姿勢・態度」と PROG の中分類項目間の相関係数は、表 4 の通りである。

表 4 GPSA 「姿勢・態度」と PROG の中分類間の相関係数

	対人基礎力			対自己基礎力			対課題基礎力		
	親和力	協働力	統率力	感情抑制力	自信創出力	行動持続力	課題発見力	計画立案力	実践力
レジリエンス(n=827)	0.21**	0.25**	0.35**	0.46**	0.40**	0.23**	0.03	-0.01	0.05
リーダーシップ(n=827)	0.41**	0.45**	0.47**	0.45**	0.52**	0.37**	0.13**	0.18**	0.25**
コラボレーション(n=827)	0.59**	0.52**	0.28**	0.21**	0.34**	0.21**	0.08*	0.10**	0.15**

\*P<0.05,\*\*P<0.01

表 4 を見ると、相関係数 0.40 を超えるのは、「レジリエンス」と「感情抑制力」「自信創出力」「リーダーシップ」と「親和力」「協働力」「統率力」「自信創出力」「感情抑制力」「自信創出力」「コラボレーション」と「親和力」「協働力」であり、これらの中に、正の相関が認められた。なお、「対課題基礎力」の中分類項目との相関では、「リーダーシップ」と「実践力」との間に 0.25 と低い正の相関が認められるのみであった。

GPSA と PROG の分類項目は、それぞれのテストが測定しているとする概念を表現している。そのため、似た言葉を使用している場合、測定しているとする概念も似ていると考えられるが、ここまで見てきたように、それぞれのテストの似ている概念や関連すると考えられる概念には、一定の関係があることがわかった。

再度表 3 を見ると、GPSA の大分類項目「経験」は、PROG の大分類項目「対人基礎力」「対自己基礎力」「対課題基礎力」とそれぞれ 0.41, 0.46, 0.37 と正の相関、あるいは、低い正の相関が認められる。GPSA の大分類項目の中で、PROG の「対課題基礎力」と相関が認められるのは、「経験」のみである。

表 5 は、GPSA の「経験」の中分類項目と PROG の大分類項目間の相関係数を表している。これを見ると、GPSA の「経験」の 3 つの中分類項目は、PROG の「対人基礎力」「対自己基礎力」「対課題基礎力」のそれぞれに、正の相関、あるいは、低い正の相関が認められる。その中でも、GPSA の「自己管理」は PROG の「対自己基礎力」と、GPSA の「対人関係」は PROG の「対自己基礎力」と、GPSA の「計画・実行」は GPSA の「対課題基礎力」と最も相関が高い。PROG の「対課題基礎力」は「課題発見力」「計画立案力」「実践力」の中分類項目からなるが、「計画・実行」とこれらの概念は似ていると考えられる。すなわち、ここでも、それぞれのテストが測定しているとする概念の中で、似ている概念同士に一定の関連があることがわかる。

表 5 GPSA 「経験」の中分類と PROG の大分類の相関係数

	対人基礎力	対自己基礎力	対課題基礎力
自己管理(n=827)	0.33**	0.45**	0.25**
対人関係(n=827)	0.49**	0.47**	0.30**
計画・実行(n=827)	0.27**	0.32**	0.43**

\*P<0.05,\*\*P<0.01

最後に、再度表 3 を見ると、GPSA の「学びへの意欲」は、PROG の「対人基礎力」「対自己基礎力」とは、それぞれ 0.37, 0.40 と低い正の相関が認められるが、「対課題基礎力」とはほとんど相関がなかった。ただし、「学びへの意欲」は PROG の大分類項目、中分類項目のいずれとも類似していると考えられる概念がないため、この意味を考えることは難しい。

以上、GPSA と PROG の 2 つの外部テストの関連をみると、両者の間には、両テストが測定しているとする概念の中で、似ている概念や関係すると考えられる概念の間には、関係性が見られることがわかった。すなわち、両テストの概念設定には、一定の妥当性があると言えるのではないかと考えられる。

### 3.1.2 GPSA と基礎学力調査及び GPA の関連

A 大学では、毎年度入学直後に基礎学力調査として、「国語」「数学」「英語」のテストを行っている。これは義務教育レベルから高等学校レベルまでの教科学力を、選択式問題で測定するものである。

表 6 を見ると、GPSA の大分類項目と基礎学力調査のスコアとでは、「思考力」だけに相関が認められた。「思考力（選択式）」と「国語」「数学」「英語」の相関係数は、それぞれ 0.51, 0.31, 0.31, 「思考力（記述・

表 6 GPSA の大分類と基礎学力調査との相関<sup>6)</sup>

	基礎学力調査		
	国語	数学	英語
思考力 (選択式) (n=829)	0.51**	0.31**	0.31**
思考力 (記述・論述式) (n=282)	0.36**	0.25**	0.36**
姿勢・態度 (レジリエンス) (n=829)	-0.09**	0.05	-0.03
GPSA 姿勢・態度 (リーダーシップ) (n=829)	-0.11**	0.00	0.05
姿勢・態度 (コラボレーション) (n=829)	-0.09**	0.01	0.04
経験(n=829)	-0.04	0.06	0.12**
学びへの意欲(n=829)	0.03	0.05	0.14**

\*P<0.05,\*\*P<0.01

論述式)」は 0.36, 0.25, 0.36 と 3 教科の中では、「国語」と最も相関が高かった。「思考力 (記述・論述式)」よりも、「思考力 (選択式)」と「国語」の相関が高かったことについては、「思考力 (記述・論述式)」の問題が「国語」の範囲だけではないことや、A 大学の基礎学力調査が選択式であることが理由として考えられるが、「英語」は「思考力 (記述・論述式)」の方の相関がやや高いため、それだけでは説明ができない。いずれにしても、GPSA の「思考力」と教科学力には一定の関係性が認められた。

表 7 は GPSA の大分類項目と「通算 GPA (2018 年度春学期まで)」との相関関係を表している。

表 7 GPSA の大分類と通算 GPA との相関係数

	通算GPA
思考力 (選択式) (n=845)	0.29**
思考力 (記述・論述式) (n=287)	0.33**
姿勢・態度 (レジリエンス) (n=845)	-0.09*
GPSA 姿勢・態度 (リーダーシップ) (n=845)	0.07*
姿勢・態度 (コラボレーション) (n=845)	0.01
経験(n=845)	0.13**
学びへの意欲(n=845)	0.15**

\*P<0.05,\*\*P<0.01

これを見ると、GPSA と「通算 GPA」の相関では、「思考力 (選択式)」と「思考力 (記述・論述式)」のみに 0.29, 0.33 低い正の相関が認められた。A 大学のシラバスには、到達目標や成績評価方法が記載されている。これらは当然ながら GPA に関わっていると考えられるが、学力の 3 要素の「知識・技能の確実な取得」「思考力・判断力・表現力」「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」に類似した表現が用いられている科目も散見される。しかしながら、「思考力・判断力・表現力」を測定しているとする GPSA の「思考力」とは相関が認められたが、「姿勢・態度」等の他の項目とはほとんど相関がなかった。た

だし、これは「通算 GPA」を用いた分析であるため、A 大学の科目を達成目標や成績評価方法のタイプに分けた上で、GPSA との関連を分析する必要があると考える。これについては今後の課題とする。

### 3.1.3 GPSA と学生調査との関連

ここでは、入学時に新入生を対象に実施しているアンケート調査及び毎年度秋学期に全学生を対象に実施しているアンケート調査から、「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」に関連すると考えられる質問項目を抽出し、GPSA との関係を考察する。

まず、A 大学の学生調査の質問項目のうち「志望順位」を取り上げる。GPSA の大分類項目と「高校 3 年 4 月時の A 大学志望順位」「受験時の A 大学の志望順位」には、相関係数 0.11 を超えるものがなく、ほとんど相関が見られなかった。ちなみに、志望順位に関する 2 つの質問項目と、今回用いた他のデータでは、「入学時点での進路先として A 大学の満足度」が、「高校 3 年 4 月時の A 大学志望順位」との間に相関係数 0.35、「受験時の A 大学の志望順位」との間に 0.33 と低い正の相関が認められた。

図 2 は「高校 3 年 4 月時の A 大学志望順位」ごとの、「通算 GPA」を 3 つの段階に分けた、GPSA の「思考力 (選択式)」の平均値を表している。ここからも、「志望順位」は、「通算 GPA」「思考力 (選択式)」に影響を与えておらず、「通算 GPA」と「思考力 (選択式)」に相関関係にあることがわかる。

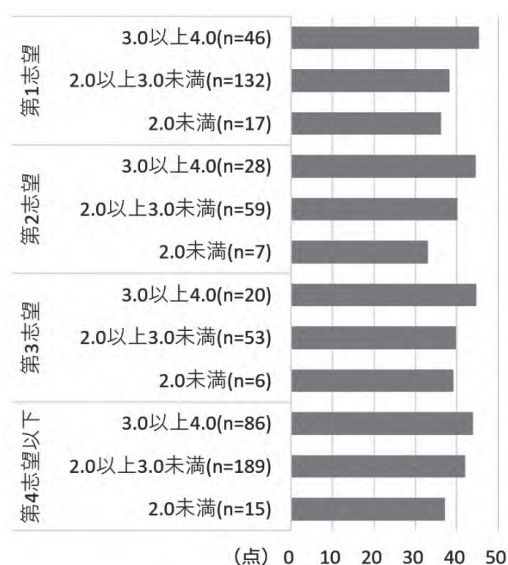


図 2 高校 3 年 4 月時の志望順位と通算 GPA と GPSA 「思考力 (選択式)」の平均値

次に、A大学の学生調査の質問項目のうち「満足度」を取り上げる。GPSAの大分類項目と「入学時点での進路先としてA大学の満足度」「現時点でのA大学の総合的な満足度」には、相関係数0.11を超えるものがなく、ほとんど相関がなかった。

さらに、A大学の学生調査の質問項目のうち「大学進学目的」を取り上げる。これは、入学時に、大学進学目的を、14の選択肢の中から複数回答可能な形で聞いたものである。選択肢の中には、大学での学びに関する選択肢「学問的な興味・関心を深める」「幅広い教養を身につける」「専門的な知識・技能を身につける」がある。大学進学目的に、これらを1つでも選択した者（選択者）と、全く選択しなかった者（非選択者）に分けて、GPSAの各大分類項目のスコアを表したものが、表8である。

これを見ると、「大学進学目的」に、大学での学びに関する選択肢を選んだ者の方が、スコアが総じて高いことが看取される。なお、これらの選択肢を選んだ者は、PROG、通算GPA、基礎学力調査、授業外学修時間のほとんどのデータにおいて、選択しなかった者より、スコアが高かった。入学時の進学目的によって、入学後のパフォーマンスに差が生まれる可能性が示唆された。

表8 進学目的に大学での学びに関する選択肢を選択した者と選択しなかった者のGPSAのスコア

進学目的 [大学での学び]	人数	思考力		学びへの意欲	姿勢・態度			経験
		選択式	記述・論述式		レジリエンス	リーダーシップ	コラボレーション	
選択者	411	41.2 (9.66)	37.8 (17.15)	63.6 (18.11)	46.7 (9.89)	44.8 (9.49)	48.2 (8.85)	52.7 (15.67)
非選択者	136	38.5 (9.65)	33.0 (15.70)	60.8 (19.83)	47.1 (9.16)	45.3 (9.47)	48.0 (8.12)	51.4 (16.07)

※ それぞれ上段が平均、(下段)が標準偏差を表す。

表9は、選択者と非選択者の「志望順位」と「満足度」を表したものであるが、ここでも、選択者の方が、概ね志望順位、満足度共に、非選択者よりポジティブな傾向にあることが看取される<sup>7)</sup>。

表9 進学目的に大学での学びに関する選択肢を選択した者と選択しなかった者の志望順位・満足度

進学目的 [大学での学び]	人数	志望順位		満足度	
		高校3年4月時	受験時	入学時点	現在の総合
選択者	411	2.76 (1.46)	1.94 (1.24)	3.75 (1.04)	3.71 (0.94)
非選択者	136	3.03 (1.22)	1.91 (1.17)	3.49 (1.07)	3.52 (0.97)

※ それぞれ上段が平均、(下段)が標準偏差を表す。

最後に、GPSAと学生調査の項目である「授業外学修時間」の関連を見る。学生調査での設問は、「授業時間外に、授業課題や準備学習、復習に、1週間あたりどのくらいの時間を費やしたか」である。

表10を見ると、「授業外学修時間」とGPSAの大分類項目とでは、「経験」に相関係数0.20と低い正の相関があるが、その他の項目とはほとんど相関が見られない。今回用いた他の学生データとの間では、「通算GPA」のみに0.24と、低い正の相関が認められた。これは、この質問の聞き方が「授業課題や準備学習、復習」に絞っていることが理由と考えられる。

表10 GPSAの大分類と授業外学修時間との相関係数

	授業外学修時間	
	全体	1年生
思考力(選択式)(n=615,406)	0.12**	0.11*
思考力(記述・論述式)(n=205,121)	0.15*	0.22*
姿勢・態度(レジリエンス)(n=615,406)	0.04	0.06
GPA 姿勢・態度(リーダーシップ)(n=615,406)	0.13**	0.13**
姿勢・態度(コラボレーション)(n=615,406)	0.10*	0.11*
経験(n=615,406)	0.20**	0.18**
学びへの意欲(n=615,406)	0.18**	0.20**
通算GPA(n=1468,722)	0.24**	0.27**

\*P<0.05,\*\*P<0.01

ところで、A大学の学生調査では、「授業外学修時間」について、1年生の方が、2年生以上よりも多い傾向にあることがわかっている。そこで、1年生だけを抽出し、相関を測定すると、表10の通りであった。

これを見ると、授業外学修時間は「思考力(記述・論述式)」「学びへの意欲」「通算GPA」とそれぞれ0.22、0.22、0.27と低い正の相関が認められる。

さらに、1年生だけを抽出し、「学びへの意欲」のスコア(100点満点)と「授業外学修時間」の関係を図3に表すと、「学びへの意欲」のスコアが上がるほど「6~10時間」の者が増え、下がるほど「1時間未満」の者が増えることが看取された。

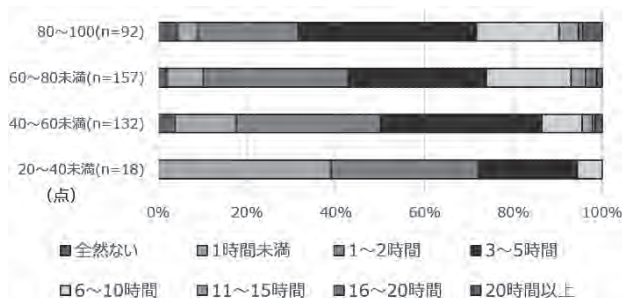


図3 GPSA「学びへの意欲」のスコアと授業外学修時間(1年生のみ。合計が10人以下のスコアの領域は除外)



GPSAの「学びへの意欲」は1年生においては、授業外学修時間と関係性があることがわかった。

### 3.2 入試との関連

#### 3.2.1 GPSA と入試区分との関連

GPSAの大分類項目のスコアを、入試区分<sup>8)</sup>ごとに見たところ、入試区分によってスコアに明確に差異が認められたのは、「思考力（選択式）」(図4)と、「思考力（記述・論述式）」(図5)のみであった。

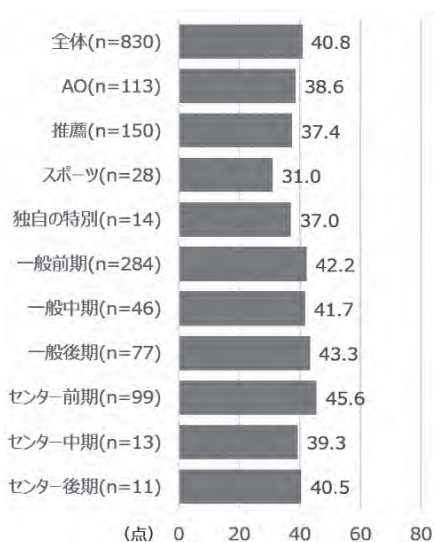


図4 入試区分ごとのGPSA「思考力（選択式）」

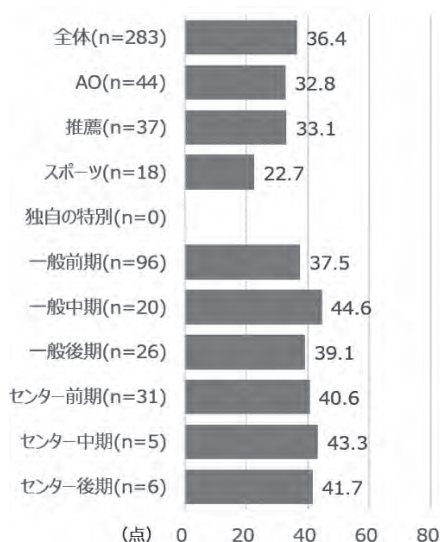


図5 入試区分ごとのGPSA「思考力（記述・論述式）」

「思考力（選択式）」において全体平均より高いのは、順に、①「センター前期」、②「一般後期」③「一般前期」、④「一般中期」、⑤「センター後期」であり、「思考力（記述・論述式）」において全体平均より高いのは、

順に、①「一般中期」、②「センター中期」、③「センター後期」、④「センター前期」⑤「一般後期」、⑥「一般前期」と、それぞれ学力を重視する入試区分であった。ただし、人数が少ない入試区分もあるため、この結果の安定性については、留意する必要がある。

### 4 おわりに

以上のように、今後の追跡調査には学力の3要素に基づく評価が必要となる状況に鑑み、外部テスト活用の可能性を考察するため、学生データとの関連を分析した結果、いくつかの有用な知見が得られた。外部テストの結果をそのまま各大学の学修成果の可視化に活用することには問題があると考え、学生データと併せて分析することで、可視化への活用の可能性を一定程度示せたと考える。

今後は、まず、調査を継続することにより、これらの知見が安定的に現れるのかを明らかにする必要がある。また、大学で開講されている科目を、達成目標や評価方法でグループ化し、それぞれのグループごとのGPAと外部テストのそれぞれの分類項目との関連を分析することも必要であろう。パネル調査により、外部テスト結果の伸長と大学教育との関連を考察することも重要である。なお、これらは、1大学のみの分析では限界もある。可能な限り、他大学との比較等の分析も行うことで、考察を深めたいと考える。

### 注

- 1) 3年生は1年次4月時にアンケート調査を実施していなかった。そのため、同年冬期に実施した調査データを使用した。
- 2) 1)と同様の理由で、本データは1年生データのみである。
- 3) 「思考力（記述・論述式）」については、845人のうち298人のみが受検した。ただし、うち11人は最終的な回答送信を行わなかったため採点結果が記録されていなかった。
- 4) 本表は、ベネッセiキャリアほか（2019）、河合塾ホームページ、成田・松村（2014）、PROG白書プロジェクト編著（2018）をもとに著者の一人である福島が作成した。
- 5) 以下、特別に断らない限り、本稿での「PROG」は「PROG（コンピテンシー）」をさしている。
- 6) GPSAの思考力（選択式）基礎学力調査について、他の2教科は受検し「数学」のみ中座した学生が1名いるため、「n=829」の記載がある行の「数学」のみ「n=828」である。また、基礎学力調査の「英語」だけは、1年生と、3年生が1年次だった際の問題と満点が異なっている。そこで、100点満点に換算した点数を利用した。
- 7) 志望順位は、数字が小さい方が志望順位が高いことを表す。
- 8) 指定校推薦と公募制推薦は「推薦」に、スポーツや文化系

の特別推薦入試は「スポーツ」にまとめた。また、社会人入試や外国人留学生試験等の通常と異なる入試は除外した。

## 謝辞

本研究は、一般財団法人 IR 総研との共同研究で実施しているものである。データ提供等種々ご協力頂いた IR 総研東山氏、村山氏には記して感謝申し上げます。

## 参考文献

- ベネッセ・キャリア・進研アド・ベネッセコーポレーション (2019). 『学習成果を可視化できるアセスメント GPA-Academic』
- 河合塾. これから求められる『新しい学力の定義』河合塾 <<https://www.kawaijuku.jp/jp/research/principle/>> (2019年3月25日)
- 成田秀夫 (2014). 「エビデンスに基づいた大学教育の再構築に向けて—ジェネリックスキルを含めた学修成果の多面的評価—」『情報知識学会誌』2014 Vol.24, No.4, 393—403
- 成田秀夫・松村直樹 (2014). 「ジェネリック・スキル測定の思考と分析の報告」河合塾・リアセック. 『PROG セミナー報告 大学教育に求められるジェネリック・スキル』,15-22
- PROG 白書プロジェクト編著 (2018). 『PROG 白書 2018』学事出版
- リベルタス・コンサルティング (2018). 『「大学教育改革の実態把握及び分析等に関する調査研究」—学修成果の把握として行われるアセスメント・テストの実態に関する調査—調査報告書』平成 29 年度文部科学省委託調査